

お薬のしおり

肺炎について No.75 (H20.1)

東京医科大学病院 薬剤部

肺炎とは、肺に炎症が起きる病気のことをまとめていいます。以前、世界を震か
んさせたSARSも、重症の肺炎（間質性肺炎）を起こして患者さんが亡くなりま
した。肺炎には、感染源を吸い込んで発病する感染性肺炎（細菌性肺炎、ウイル
ス性肺炎、真菌性肺炎など）と、薬剤性肺炎やアレルギー性肺炎などの非感染性肺炎
があります。大多数は感染性肺炎が占め、高齢者などで多く見られる誤嚥性肺炎も
感染性肺炎に含まれます。

感染性肺炎の中の細菌性肺炎の場合、例えば風邪を引いて気管支の粘膜に炎症が
起こったとします。通常なら菌は痰と一緒に排泄されます。しかし、菌が残ってし
まうと菌によって起こされた炎症が肺の奥まで達してしまい肺炎となります。特
にお年寄りの場合には、免疫力が落ちているため、ちょっとした風邪から肺炎を起
すことが少なくありません。また、糖尿病、心臓病、脳血管障害、腎臓病、肝臓病
などの慢性疾患のある方も免疫力が低下している場合があるため注意が必要です。

感染性肺炎を起こす病原微生物は①細菌（いわゆるバイキン）②ウイルス③マイ
コプラズマ（細菌とウイルスの中間のような生物です）④真菌（カビ）の4種類に
分けられます。

感染性肺炎は、ウイルス性肺炎、細菌性肺炎、マイコプラズマ肺炎の順に多く見
られます。マイコプラズマ肺炎とは聞きなれない言葉かもしれませんが、その発生
は、年間をとおして見られます。特に流行は秋が多いよ
うです。4～7年毎に大きな流行が見られ、日本では、
4年毎のオリンピック（夏季）の年に流行が見られ「オ
リンピック病」とまで呼ばれたこともありましたが、最
近はそのような傾向ではなくなっています。真菌性肺炎
は一般的にはまれです。腎臓病や膠原病などでステロイ
ドホルモン剤を服用していたり、白血病などで極端に抵
抗力が低下している時などにかかります。



肺炎の進行を感染性肺炎を例にとって説明しますと、はじめは喉の痛みや鼻水、鼻づまり、咳、頭痛といったかぜの症状から始まります。やがて高熱が続き、咳、痰、ゼーゼー（喘鳴）、呼吸困難、顔面紅潮、チアノーゼ（唇や爪が青黒くなる）などの症状が現れます。さらに、炎症の全身反応として、発熱して、食欲が低下し、水分も取れなくなって脱水症状を起こすこともあります。ひどい肺炎では、呼吸困難をきたして人工呼吸器を必要とすることもあります。

ただ、生まれて間もない赤ちゃんでは、あまり咳も出ないで、突然ショック状態や高熱、チアノーゼを起こし、レントゲン写真で初めて肺炎と診断されることもあります。

また、高齢者では、熱などの症状が出にくかったり、症状をうまく伝えられずに、発見が遅れることがあるので、周囲の人は、普段から、高齢者の様子に気を配ってあげることが大切です。

治療の基本は、安静、保温、そして水分補給です。そして、症状を緩和させるために、咳止め（厳密には、痰の排出を促進させる薬が多い）や解熱剤などを使用します。さらに感染性肺炎の場合には抗生物質を用いて原因となった細菌やウイルスなどを退治する治療を行います。細菌性肺炎やマイコプラズマ性肺炎に対しては、抗菌薬を使い、ウイルス性肺炎には抗ウイルス剤を使用するときもあります。

いずれの場合も年齢や感染した場所などにより肺炎の起炎菌が異なるため、それにあわせて最適な抗菌薬や抗ウイルス薬を選択し治療します。

肺炎の予防は、基本的には、インフルエンザ流行期の注意点と同じです。外から帰った後は、よく手を洗い、うがいをして感染症罹患を防ぎ、かぜをひかないように注意します。ひいてしまったら安静を保ち早く治すことが大切です。また、換気をよくして室内の空気を清潔に保つこと、自分のアレルギーを知り予防対策をとること、禁煙をすることも予防に繋がります。

健康な人の場合は、肺炎にかかっても完全に治りますし、後遺症を残すようなひどい肺炎はまれです。万が一、病的に抵抗力がない（免疫不全）場合には、1～2週間では治らない場合もあるでしょう。微熱や痰がきれない咳が長期間持続しているときなどは、主治医にご相談ください。

